



Profile — 渡部 洋

1971年、東京大学教育学部教育心理学科卒業。1978年、アイオワ大学(Ph.D.)。大学入試センター研究部助手、助教授、東京大学教育学研究科助教授、教授を歴任。著書は『ベイズ統計学入門』(福村出版)、『心理・教育のための統計学入門』(金子書房)、『心理統計の技法』(編著、福村出版)など。

1974年のことですから、もう40年近くも昔の話となりますが、突然恩師の芝教授に呼ばれ、「アイオワ大学でアシスタントシップをくれるそうなのですぐ行きなさい」と言われて、慌てて準備を始めたのがその年の秋も遅い時期でした。翌年の1月からの授業に間に合うようにということで、どたばたなんとか書類は整えたものの、英会話は付け焼き刃もいいところで、先輩の先生に「コンセントをつないで電気をつける、というのを英語でどう言うか知っているか? そうするのが難しいんだよ」と言われ「むむむ……」となったりしたものでした。また、子どもが生まれたばかりの大学院生でしたので、お金も全くないという状態でのスタートでした。アイオワの冬は寒いというので、防寒性の高い厚手の裏に毛がふさふさしているコートなどを買い込み、送料をかけられないので出来るだけ着込み、当時最安で今はとっくにつぶれてしまったタイのエアサイナムという航空会社の飛行機

アメリカ留学記

ベネッセ教育総合研究所 顧問／東京大学 名誉教授

渡部 洋 (わたなべ ひろし)

で、まずホノルルに飛び、そこから乗り換えてシカゴへ行くというコースでの出発でした。

初めての飛行機で、意気揚々と乗り込んだのはよかったですですが、全然飛ばうとしません。何時間も待たされ窓から翼のところをみるとクレーンでエンジンを外して下ろし始めたので、一体何をしているのだろーと思っていたところ、機内アナウンスで「エンジンの具合が悪いので、取り換えます。出発は相当遅れる予定です」とのことでした。結局、半日近くも遅れてホノルルに到着しましたが、乗り換え予定の飛行機はとっくに出発してしまっていました。たどたどしい英語で、空港の係官にきくとエンドウメントを貰って来なさいと言われたのですが、これがわからない。いろんな人たちにきいてやっと航空会社にサインをしてもらうことだとわかって、エアサイナムのカウンターを探したところこれが空港の一番逆の端! アロハシャツと半ズボンで歩く人々をしり目に、厚手のオーバーを着込み完全防寒のいでたちで大きな荷物を抱えて汗だくで、広い空港を横切ってカウンターまで行き、また戻ってパンアメリカのカウンターで再手続き、これがまた態度の悪いおばさん。しかし、やはりアメリカに留学した私の友人などは「I cannot speak English.」という札を胸にぶらさげさせられたということですから、それに比べれば、まだ良いほうだったのかもしれませんが。機内のキャビンアテンダントもみんな態度の悪いお

ばさんで、寝ているとどつかれて「イート!」と言われて食事をするという次第でした。

指導教授のノヴィック教授はテスト理論で名高い人でしたので、その領域の講義だと思ったらあにはからんやベイズ統計学の話ばかり。仮説検定論しか知らぬ身には青天の霹靂。しかも当時客員教授としてアイオワ大学に招聘されていた英国の名高い統計学者のリンドレイ教授のベイズのゼミをとることとなり四苦八苦。まさにマイナスからのスタートでした。ノヴィック教授はアイデアの豊富な優秀な研究者でしたが、残念なことに比較的若くして亡くなりました。彼が健康で長生きしておられたら現在のテスト理論はもう少し違った形になっていたかもしれません。リンドレイ教授は、恐らく当時最高の統計学者で、その頭脳明晰なこと! そのような人物を知り得ただけでも留学の価値はあったと思わせていただきました。

その後は、統計学と数学の授業をたっぷりとらせていただき、実に充実した時期を過ごさせていただきました。博士論文は、ベイズ流の多変量分散分析をテーマとし、その研究を進めるためにかなり高度な数理統計学の論文に当たりましたが、難なく読める自分に留学した甲斐があったことを実感しました。学位取得後は、カリフォルニア大学リバーサイド校の統計学部でポスドクをしました。大学から帰宅してアパートのプールでひと泳ぎしてから飲むテキーラは格別でしたが、9ヶ月で期間終了帰国となりました。